まだ生まれてもいなかった“26年前”を僕らは伝えたい

1995年(平成7年)
1月17日
火曜日
↓
2021年(令和3年)
1月17日
日曜日

一七→新聞

取材記事の全文をnoteにて発信中！

主催
神戸市建築住宅局
耐震推進課

共催
(一財) 神戸すまい
まちづくり公社

1.17→(イッテンイチナナカラ)とは？

阪神・淡路大震災を経験していない学生が、震災を学び、取材をし、感じたことを記事として発信するプロジェクトです。学生からの発信を通して、同世代だけでなく、震災経験者にも、改めて地震対策をジブンゴトとして考えてもらえればと思っています。

ロゴに関して

1.17→
イッテンイチナナカラ

黄色の５つの丸は、阪神・淡路大震災以降の震度７の地震を表しています。
上から、北海道胆振東部地震、東日本大震災、新潟県中越地震、熊本地震（２回）の５つです。緑色が阪神・淡路大震災です。６つの丸は、各地震の震源に合わせて配置し、大きさはマグニチュードに比例しています。

※このロゴマークは、昨年度の1.17→で制作されました。学生それぞれが案を持ち寄り、その中からプロのデザイナーが選び、ブラッシュアップして完成に至りました。

KOBE UNESCO City of Design
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

取材先：神戸市職員 松崎太亮 氏

これからは“共感”を語り継ぐ

取材　岡田敏和・末常生英
谷口浩都・出口真愛・森島みなみ

震災が起こった当時、神戸市の広報課職員として自転車で神戸市内を走り回り、ビデオカメラで記録し続けたのは松崎太亮さん。当時の状況を未来に伝えなくてはといった想いが松崎さんを走り続けさせたのだろう。私は現在23歳。神戸には18歳の時に来たが、実際に震災の映像を見たことはなかった。今回、映像を見てお話を聞いていくと当時の状況が鮮明に脳裏に焼き付いた。日常の景色だった家、道路、駅などが崩壊し、黒煙が至る所から昇っている。松崎さんが映像の中で「なんちゅうことや…」と街を見て叫んでいたのは深く納得できた。当時の状況を知らない私に「何をわかるんや」と思う方はいるかもしれない。しかし、そんな私でも当時の状況を知らない人に細かく伝えることはできる。このように『震災を知らない人が学び、知らない人に伝えていくこと』がこれからの未来に震災が起こった際、自分の身を守り、大切な人を助けられる人を増やす。そして減災や復興に役立つと私は確信している。

東日本大震災で6年生が1年生の手を引いて屋上へ逃げる避難訓練が役に立ったというニュースは、今でも記憶に新しい。震災を経験していない者同士が同じ目線で教えあい、学びあうことで震災に対する意識がより深くなるのではないだろうか。

震災を伝える上で大事なことは「共感すること」だと松崎さんは教えてくれた。人の話を聞いても、自分で解釈せずに、そのまま伝えるだけでは共感できない。そして記憶にも残りにくい。４００年ごとに神戸に大地震が起きている記録はあるのに、なぜ神戸に地震が来ないと言われ続けてきたのか。まさに記憶の風化ではないだろうか。現代社会には映像を記録していく技術がある。その映像を見て、震災を知らない人同士が語り合い、共感することができる環境を増やしていくことが大切だ。未災者である私たちにも、まだできることがある。



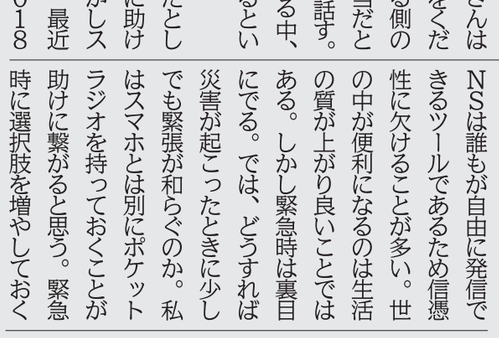
取材先：ラジオ関西 & フリーアナウンサー 藤原正美 氏

ラジオが照らした燈

取材
大石祥子・谷口浩都
福島有紀哉・森島みなみ

震災当時、人々を繋いでいたラジオ。それは、これからも残り続ける。1995年といえばまだ携帯電話が普及していなかった時代。フリーアナウンサーである藤原正美さんは、地震発生直後、AM神戸（現ラジオ関西）で、奇跡的に残っていたマイク2本を使って懸命に地域の方々に避難を呼びかけていた。緊急時において、ラジオは人々が情報を得る最後の砦として、人々に安心感をもたらしていた。ラジオ関西は、地域密着型の放送局。震災時には被災者が生きていくために必要な情報にフォーカスを当てて伝えることができた。さらに被災者が情報提供者となって生活情報を提供することで、ラジオとリスナーが一つになって安心感をつくっていった。当時は情報の信憑性を確かめる「裏取り」をする余裕がなかったにも関わらず、ラジオ関西にはクレームの電話が一本もなかったという。藤原さんは「リスナーさん、電話をくださる方、私たち伝える側の信頼関係があり、本当だと信じて話していた」と話す。必死に生きようとする中、人々はみな善人になるという表れだった。

今、震災が起こったとして人々はまずスマホに助けを求めるだろう。しかしスマホは万能ではない。最近の体験談がある。2018年6月18日の午前8時頃、大阪北部地震が発生した。発生時、私は電車の中にいた。地震発生後、家族や友人に連絡を取ろうとすぐスマホに助けを求めたが電波障害が起こり、なかなか繋がらなかった体験をした。1時間経った後に電波が回復したが、結果的に電車が動かなくなり芦屋付近から自宅まで3時間かけて徒歩で帰ったことを今でも忘れない。急に非日常なことが起きると人々はパニックになり皆同じ行動に出る。電波が繋がり始めても、ネット上の情報は信憑性が高いかは不透明である。特にSNSは誰もが自由に発信できるツールであるため信憑性に欠けることが多い。世の中が便利になるのは生活の質が上がり良いことではある。しかし緊急時は裏目にでる。では、どうすれば災害が起こったときに少しでも緊張が和らぐのか。私はスマホとは別にポケットラジオを持っておくことが助けに繋がると思う。緊急時に選択肢を増やしておくことが安心感になる。また、日ごろの備えとして藤原さんが教えてくれたのは「普段から家族や大事な人と災害が起こった時はここにいるという約束を事前にしておくことが大事」ということだ。現代は「デジタル化」が推進されているがあえて「アナログ」にも目を向けることが、私たちを助けるきっかけになるのではないかと思う。



取材先：神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 准教授 槻橋修 氏

模型が灯す未来とこれから

取材 岡田敏和・鎌田春風・出口真愛

“失われた街”模型復元プロジェクトとは…

人々の記憶や思い出を手掛かりに、真っ白な模型に文字や色を書き入れていき、街を復元する取り組み。取材前、私は正直、街の復興に貢献できるリアルな取り組みを優先した方が被災者にとって良いのではないかと感じていた。けど約2時間後、プロジェクト創始者である神戸大学工学部准教授で建築家の槻橋修さんのお話を聴いて、被災地応援の新たなカタチを知ることになった。

被災者の方が語る記憶は、明るく楽しい記憶

模型を目の前にして、被災者の方々が話すのは楽しかった思い出話やお隣さんとのエピソードが多いと槻橋さんは語る。震災という悲しい出来事を思い出す活動でもあるため、重い雰囲気になるのかと思っていた私にとっては意外だった。どこの桜がきれいだったという地元ならではの話や行きつけのお店の話、中には、お線香をあげて亡くなったご近所さんを偲ぶかのように、模型に書き込む方もいた。これは、お通夜やお葬式のときに、故人との楽しかった思い出話に花を咲かすケースが多いことと共通している。模型復元プロジェクトは〝街のお通夜〟のような役割を果たしているのではないかと槻橋さんは語る。

震災を知らない私達にできること

私の父は阪神・淡路大震災の被災者だ。1月16日の夜、父は普段寝ている2段ベッドの下の段ではなく上の段で寝ていた。17日の朝、地震発生によって1段目は押し潰された。もし、父がいつも通り1段目で寝ていたら…考えるだけでゾッとした。今この世に私が誕生しているのも奇跡だと実感する。しかし、実際に震災を経験していない私達は、いざ震災が起きた時にどうするか。取材の中で、槻橋先生にこの疑問を率直にぶつけてみたところ「忘れてはいけない」から当時の状況を調べる。「継承しなければならない」からニュースを見る。そんな受け身の姿勢で学んだことは、いざというときあまり役に立たない。主体的に〝知りたい〟というモチベーションを軸とすることが大切というヒントを頂いた。震災は天災のため発生することは防げない。しかし、我々の取り組み次第で被害を減らすことはできる。近い将来起きると言われている南海トラフ地震が発生した際、若者の動きによって被害の規模や街の復興、経済の復興速度は左右することもできる。いざというとき私たちが弱気にならず自信を持ってリーダーシップを取ることで、大切な家族や友人を救えるのである。そのためには、普段から「家族で避難場所は決めているか」「家のどこに避難バッグがあるのか」など〝減災〟のための問いを、身近な人に投げかけることが私たちの役割であると考える。



「忘れた頃」に、備えを。

文章 横山 拓也

東北の被災地で一瞬言葉を失った。現地で一緒に遊んだ小さな子どもが、ふとした瞬間に「お母さんを亡くした」と言った。被災者の方々がつらい表情で、当時の話を語ってくれた。私は正直どうすれば良いのかわからなかった。でも、この悲しみは二度と繰り返してはならない。それだけは肌で感じ取った。何が出来るのだろう。何度も何度も考えた。「ひとりでも多くの方々に災害対策をして欲しい」という願いにたどり着いた。でも災害対策なんて後回しになってしまうのが現状だ。毎日を生きることは簡単ではない。けれど残酷にも災害はいつも忘れた頃にやってきて、多くの人を悲しませる。だからもし、気持ちに余裕ができたとき、この記事を思い出してくれたら嬉しい。大切な人を守れるように。救えたはずの命があったと後悔しなくて済むように。何より、あなた自身を守れるように。

地震から命を守るために

この1.17→の学生の取材に同行し、様々な人から阪神・淡路大震災の当時の話、これまでの話、これからの話を聞きました。全員が関西では大きな地震は来ないと思っていたと言っていました。完全に想定外だったと。

この26年間に震度7の地震は6回も起こっています。熊本では、震度7の地震が連続して2回も起きました。神戸でもまた大きな地震が起こるかもしれません。

地震から命を守る取組みとして、建物の耐震化、家具の固定、危険なブロック塀の撤去などがあり、いずれも神戸市の補助制度があります。

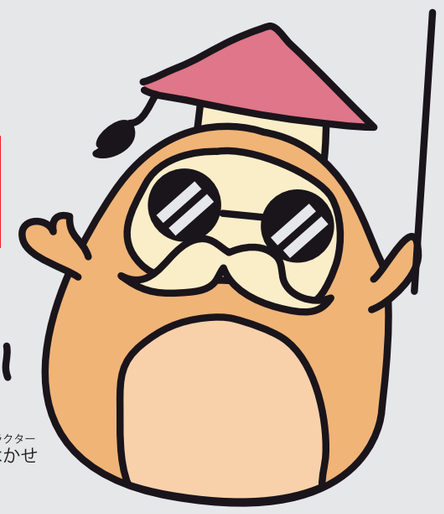
あなたとあなたの大切な人を守るために、
すまいの耐震化を進めましょう。

神戸市 耐震推進課

相談は「神戸市すまいの総合窓口　すまいるネット」へ
☎ 078-647-9933

そのすまい
大丈夫ですか？

無料耐震診断、耐震改修補助を
受けられる制度があります。



神戸市耐震キャラクター
オキールはかせ

神戸市すまいの総合窓口
すまいるネット
すまいるネット 神戸　検索

神戸市すまいとまちの安心支援センター
〒653-0042 神戸市長田区二葉町5丁目1-1アスタくにづか5番館2階
受付時間：10時～17時（水曜・日曜・祝日を除く）
TEL 078-647-9933

“災間社会”に生きる —「伝える」新聞記者の使命 —

取材先：神戸新聞社 編集局 報道部長 長沼隆之 氏　取材 大石祥子・末常生英・福島有紀哉・森島みなみ

「遺体の写真を撮っていいのか、その葛藤の中でずっと過ごしていた」。震災発生当時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん（53）。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。

災間社会に生きる

これから災害に遭う人、未来の被災者である「未災者」。そして、震災から次の災害までの間の社会に生きているという意味を込めた「災間社会」。26年前の今日起こったことを教訓とするために、長沼さんはこれらの言葉を使って「備える」ことの大切さを伝えている。「災間社会」に生きる「未災者」の私たち。いつ災害が起きてもおかしくないという危機感をもたらす言葉であり、備え、生き抜くことの難しさに気付かされる。

新聞の力

長沼さんは、新聞の持つ力を「情報はライフライン」という言葉で喩えていた。被災地となった神戸で「伝えなければいけない」という記者としての使命を背負い、取材を続けた経験から生まれた言葉だ。現在のようにインターネットが普及していない90年代、新聞は情報を得る手段として欠かせなかった。被災当時の新聞には、被災状況についての情報はもちろん食料や水の配給情報なども掲載されていた。また、日に日に増える死傷者の数や被災状況以外に、少しずつ〝被災地での子どもの誕生〟や〝避難所となった小学校での入学式〟などの記事も掲載し、人々に生きる希望を与えていた。まさに「情報はライフライン」。情報が情報を呼ぶ社会のなかで「正確さ」「信頼」こそが重要であると長沼さんは語る。熊本の地震ではSNSで「動物園からライオンが逃げた」というデマが拡散されたが、不確かな情報を裏取り取材をして正すことも新聞の役目なのである。

若者×新聞

震災を経験せず、物心ついた頃からインターネットがあった学生の私には、今回の取材で伺った話のどれもが驚きと気づきにあふれていた。しかし「有事の際、情報を得るために「新聞」を思いつく若者はどれだけいるのだろうか」という疑問が、取材中、何度も頭をよぎった。「災害に備える」というのは、建物の耐震化や避難訓練だけではないことに気づいた。有事の際、避難することができたとしても、その次には避難所での生活が始まる。そこで必要になるのが「ライフラインの確保」。水や食料と同じぐらい、情報が重要になってくる。自分だけでなく、家族のためにも「情報を集める若い力」が必要となる時が必ずやって来る。現代においても新聞の持つ「正確さ」「情報を正す力」が変わることはない。問題はその力を、若い世代が活かせるかどうかだ。「災間社会」において、「情報を得る力」「見抜く力」を養うことも、災害に備えるアクションの一つと考えて良いと私は思う。

断層の巣と共に強く生きる

取材先：北淡震災記念公園 総支配人・語りべ 米山正幸 氏　取材 芝光彩・谷口浩都・坪内壽音・横山拓也



兵庫県淡路市（旧北淡町）にある北淡震災記念公園を訪問した。まず目を奪われたのは、実物の野島断層、一緒に展示されている説明文と模型、様々な角度から撮影された震災当時の写真だ。野島断層は、平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部を震源として発生した「兵庫県南部地震」の震源となった活断層の一つである。北は江埼灯台付近から南は富島地区まで、長さ約10キロにわたって続いている。断層の長さは地震の大きさとも比例しているため、将来発生する地震の規模を推定することが可能だ。近畿地方は断層の巣と呼ばれており多くの断層が存在する。約2000年周期で動くといわれており、それらはたった10秒で破壊するといわれている。自然のエネルギーによって動き、10秒で破壊される断層は動いてしまった後、何か対策を施すことは現時点で不可能に近い。だが、断層付近の住宅でも全壊した例と被害が少なかった例がある。これは断層の状態に差があることだと考えた。活断層に近いほど揺れが大きいのは明らかであるが、それらへの対応として、壊れにくい、壊れたとしても被害を最小限に抑えられる住宅や建造物を建てるようにすることが大切だ。正直、断層への理解は難しい。だからと言って「難しいから知らない」「興味がないから」と逃げるのではなく、断層と共に生きるために、まず「ジブンゴト」として捉え、もしもの時のために防災グッズなどを準備して備えることから対策は始まる。

挨拶から始まる防災対策もある

「阪神淡路大震災でも、都会の神戸と田舎の淡路には差が出た」。そう語ったのは、北淡震災記念公園の総支配人であり、語りべでもある米山正幸さんだ。米山さんは、生後2か月の娘と妻の3人で寝ている時に阪神・淡路大震災にあった。当時米山さんは地元の消防団に所属しており、発生後すぐに救出活動を開始したそうだ。北淡町では39人が亡くなったが、生き埋めの300人は地震発生当日17日の正午過ぎまでに全員助け出し、夕方5時過ぎには行方不明者0を発表するに繋がった。2020年2月現在、阪神・淡路大震災による行方不明者は神戸市で2名、西宮市で1名の計3名である。同じ震災により明らかになった都会と田舎の差。それは「地域コミュニティ」である。米山さんの住む富島は近所とのつながりが密であり、その時間に誰がどこで何をしているのかなど、細かい情報が分かっていたという。そのおかげで、生き埋めの人をピンポイントで掘り起こすことが出来たそうだ。わたしたちに今必要なことは「つながり」なのかもしれない。毎日の挨拶ひとつでもいい。地域の祭りに参加するでもいい。「自分はこの地域の一員である」。そのような思いをもって生活をすることが、防災対策へと繋がっていくと感じた。

共に生きる住まい —「安心」を「耐震」から —

取材先：一級建築士 川崎史 氏　取材 大石祥子・末常生英・福島有紀哉・森島みなみ

「耐震工事後に〝前はめっちゃ揺れとったのに全然揺れへんやん〟と言われたとき、やりがいを感じます」。そう語ってくれた川崎史さんは一級建築士。神戸で37年間に渡り、建築設計監理に携わっている。

天災がないと思われている神戸を襲った未曾有の大地震。「まちを再建したい」。その思いから震災後の2、3年、川崎さんはとても忙しかったという。震災から約10年後には神戸市が耐震化の補助制度を設けるなど、徐々に耐震化の重要性も認められていった。そんな中「自分で始められる耐震は、まずは自分の住んでいる建物をよく知ること」と川崎さんは語る。〝安全だろう〟という思い込みは、震災がないと思っていた過去と変わらない。あらためて自分の安全は、自分で考えることから始めたいと思った。

神戸市の耐震化の補助制度の対象となるのは、昭和56年以前に建てられた住宅。そのような家に住んでいるのは多くが高齢者で、耐震化を勧めても断られることが多いという。「高齢者の方にとっては、お子さんも出て行って自分だけとなると〝もう（耐震化）せんでええねん〟という心境になる。もういつ死ぬかわからへんと言う」。震災経験のある高齢者の方に、私たちが改めて何かを伝えることなどできるのか。そう考える一方、自分の子や孫を想い、自身はないがしろにしてしまうその姿を、自らの祖父母とも重ねてしまう。けど、明日もその先も一緒に生きていたい。ただひたすら無事と安全を願う家族、大切な人がそこにいる。自分の安全を守ることも誰かの想いに応えることではないかと私は思った。

「震度7に堪えられる保障は難しいが安心はもらえる」と川崎さんは話す。地震に備えることは、私たちが暮らしていく未来に安心をくれる。その安心は住む人だけではなく、家族の安心でもある。来たるそのとき、災害が起こる瞬間のためだけではなく、日々の暮らしのための耐震を考えたい。



「寄り添うことも大切だけど、自ら引っぱることも大切」

取材先：神戸・三宮センター街一丁目商店街振興組合 副理事長 植村一仁 氏　取材 岡田敏和・鎌田春風・出口真愛

震災未体験世代である私たちがよりリアルな震災の姿を知るため、神戸・三宮センター街一丁目商店街振興組合の副理事長、植村一仁さんに当時の話を伺った。

Q：植村さん、震災当時の様子を聞かせてください。

ずっと洋服店をやっているんやけど、うちは今年で125周年。当時大学2年生で、語学テストの前日やってんけど地震で起こされて、リビングに行ったらブラウン管のテレビが飛んでいた。当時は親父が社長やったので、とにかく状況がわからんから、三宮に行って帰ってきたときは悲壮な顔だったのを覚えてるかな。大学は校舎も潰れて電車も通ってないから結局学校にいったのは5月くらいだった。

Q：震災があったことで、神戸を離れる人も多かったんでしょうか。

離れていった人もいるし、逆に他府県から来た人もいた。「一緒に復興しようと思って、会社を移転させました」というと、みんな偽善っぽく思うかもしれないけど、僕は被災地にお金を投資してくれるなんて凄いことやと思った。東北の震災前、センター街の大型ビジョンにつけるシェードを気仙沼にある会社に依頼をしてた。それが完成して、あとは神戸に運ぶだけって時に震災が起きて全部津波で流された。津波到達からしばらくして社長も無事だとわかって、こっちの理事会でもどうするか話したんだけど「この状況でキャンセルしますってのは無いね。時間がかかっても待とう」という話にすぐなった。事業主はどう復活していくかというと、事業をやって復活していくしかない。そんな想いが震災を経験した僕らにはあったんだよね。

Q：神戸の震災から26年。次世代に記憶を残していくにはどうしたらいいですか。

記憶はその人にしかないわけで、戦争や原爆の記憶を伝えていくというのはすごく難しいよね。あくまで伝えていくのは記録。ただ、その人の体験や起こった出来事を聞いて「どう活かすか」という視点があるとええんちゃうかな。「大変でしたねえ。かわいそう」で終わるのはあまり意味がない。「次はこうしよう」と次につながる動きが起こることが一番かな。

「悲しみに暮れる人に寄り添うことも大切。だけど、街を復興させるには、復興にやる気のある人が率先して立ち上がり、リーダーシップをとることも大切」。そんなお話を聞いて、神戸の人の力強さを感じた。復興はゼロあるいはマイナスからのスタート。どうしても時間がかかることだと思う。けど素早く元の姿に戻り、素敵な街並みを取り戻した神戸を支えたのは、被災した当事者の方々の負け ん気であると実感した。

遊ぶように、防災を学ぶ。

取材先：NPO法人プラス・アーツ 理事長 永田宏和 氏　取材 芝光彩・谷口浩都・坪内壽音・横山拓也



今回、私たちは「社会課題解決にクリエイティブな力を使う」をモットーとし神戸を基盤に活動を続ける、KITTO／NPO法人プラス・アーツの永田宏和さんにお話を伺った。西宮出身の永田さんだが、阪神・淡路大震災の当時、京都で仕事をしており関わりのあった西宮や神戸のために活動したかったのに何もできなかったと振り返る。しかし、その10年後。永田さんは防災の仕事に関わっていくこととなり、防災教育の第一人者といわれるまでになった。現在、様々な企業や国が永田さんが取り組む防災に注目。日々、多種多様な分野から声を掛けられている方だ。

お話を伺った数ある活動の中で、私たちが最も印象に残ったもの。それは防災プロジェクト「イザ！カエルキャラバン！」だ。この活動では、子どもたちやその保護者が防災について楽しみながら学ぶことができる。活動は国内外に広がっており、その地域に合わせたものに進化中。「カエルキャラバンはみんなでつくる地域のお祭り。そのために、自分たちはタネ（活動）を運ぶカゼ（企画プロデューサー）となる」。永田さんはこのようにおっしゃっていた。

この言葉を表すように永田さんは地域の住人に対して、子どもからお年寄りまでもが協力して防災について学ぶことのできる仕組みを創っている。その際、永田さんがこだわっていることは、地域の方が参入し、オリジナリティなものに変換できるタネ（活動）、アイデアを運ぶこと。地域の方が、主体的にカエルキャラバンをヤモリキャラバンに変えていったり、新聞紙でつくるお皿をバナナの葉で作成したりしている。このように、カゼ（企画プロデューサー）の役割として、ただ伝えるだけでなく、地域に根付き普及するようにその土地、その地域の方が主役になる環境を形成することでタネ（活動）を広げている。だからこそ、この活動によって地域コミュニティが形成され、万が一の時に対応できる街になっていくのだと感じた。この街の人が介入してできあがる仕組みを創る背景には、様々な困難があったと話を聞いていて感じた。ある程度できあがった型を提供する方が簡単でラクではある。しかし、本当に街のこと、相手のことを想い考え行動してきたからこそ、今のカエルキャラバンがある。私自身も永田さんのように相手にとって必要なものを考え抜ける『カゼ』のような人になりたいと強く感じた。

書評

神戸新聞の100日

文章 末常生英

「午前5時46分」。この言葉を聞くだけで、震災を経験していない若者でも神戸の人間であれば、誰もがあの日のことを思い出す。私も震災を経験していない若者の一人だが、幼いころから学校で毎年のように震災学習を受けてきたため、震災のことはよく知っている。そのつもりだった、この本に出会うまでは。

神戸新聞社は、阪神・淡路大震災によってコンピューターシステムが完全に麻痺。あらゆる機材が使用できなくなった状態から、翌日には新聞の製作、配達に至るという偉業を成し遂げた。私はこの偉業を過去に聞いたことがあったため、なかば興味本位で本書を選んだ。しかし、その道のりは私が思い描いていたほど生易しいものではなかった。そこには、社員のジャーナリストとしての取材の葛藤や苦しみ、刻々と迫る時間と闘う姿があった。

本書は震災によって被災した神戸新聞社の復旧・復興を克明に描いたノンフィクションのドキュメンタリーである。構成は第1章「本社崩壊」から第6章「生きる」までの6章で、震災前夜から被災、復旧と時系列で進んでゆく。全体を通して、人物の精神描写や被災した街並みの悲惨さに、とてつもなく臨場感があった。特に、被災直後の社員それぞれの様子や街の様子が事細かに描写されていた冒頭部分は、読み初めにしてはかなりの衝撃があった。その後の新聞製作についても、刻一刻と迫る締め切りに「時間がない。最短距離でつくらなアカン」「ぶっつけ本番」と彼らの焦りや憤りを自分のことのように感じられた。震災当時の様子をここまで詳細かつリアルに描かれている本は、あまり多くないのではないだろうか。冒頭に述べたように、私は震災についてよく理解していたつもりだった。しかし、本書の冒頭から「16日午後7時」「17日午前3時半」と、地震が来ることなんて知る由もない人々の背後に迫りくる震災の気配。この理不尽な危機感だけで、私はこれまで感じたことのない震災への憎しみを覚えた。このときはじめて「自分は震災を知らないんだ」と痛感した。

本書は、私のような「震災を経験していない若者」に是非とも読んでもらいたいと思う。震災学習で、悪い意味で「震災慣れ」してしまっている私のような若者には、震災に対する意識を変える良い刺激になるはずだ。また本書は新聞社内の機械類や専門的な話も多いため、映像資料として2010年に放送、DVD化された『神戸新聞の7日間』もあわせて視聴してみると、何名か本書の登場人物が出てくるため、話の展開を理解する助けになると思うのでお勧めする。

メンバー紹介

学生記者
大石 祥子 / 岡田 敏和 / 鎌田 春風
芝 光彩 / 末常 生英 / 谷口 浩都
坪内 壽音 / 出口 真愛 / 福島 有紀哉
森島 みなみ / 横山 拓也

ライティング補助
吉本 圭輔（トゥモローゲート株式会社）

デザイン
すみかずき（KEYDESIGN）

企画
主催：神戸市建築住宅局耐震推進課
共催：（一財）神戸すまいまちづくり公社